

手づくりで、ものづくりの現場が 感じられる商品

文明開化から始まった靴づくり

靴は明治維新後の文明開化の象徴の一つでした。現代からは少々滑稽にも見えますが、袴姿の女学生が靴を履くのは時代の先端をいくお洒落そのものでした。一方で日本は欧米列強に追いつくため富国強兵策をとります。靴は軍隊にとって重要な装備品の一つです。やがて靴は軍需産業となり、製靴工場で技術を身に付けた人の中から、戦後になって独立開業する人が出てきました。昭和20年代に、名古屋靴工業組合が設立されると、約50社が参加しました。その当時、着物を日常的に着用する女性がまだまだ多かったため、靴づくりといっても紳士用が中心でした。当初は靴底を鋤打ちしたり手縫いで取り付けていましたが、昭和30年代になると強力な糊が開発され、靴づくりも変化します。さらに日本の経済成長にあわせ、女性も積極的に社会へ進出するようになると、女性用の靴の需要も増加していきました。男性用に比べ、女性用の靴の方がファッションには敏感です。

日常品の地産地消を目指して

昭和40年代の中頃が組合としても最盛期であっ



たようです。しかし、零細企業が多く、大量生産に十分な対応ができなかったこともあり、徐々に組合員が減少していきました。平成21年、ついに名古屋靴工業組合は解散を余儀なくされました。しかし、永年にわたり培ってきた技能を継承するため、それまで組合の有志がおこなってきた組合事業の一部を継承し、平成21年に靴デザイン・クラフトスクール運営委員会を立ち上げ、アンテナショップも経営しています。スクールでは後継者の育成だけではなく、趣味として靴をつくってみたいという社会人や、将来靴づくりの仕事に携わりたいという若い人まで幅広い年齢層が学んでいます。

靴づくりのキーワードにはファッション性、健康、あるいは価格重視などさまざまありますが、スクールが目指しているのは日用品の地産地消です。例えば最近鹿などによる森林被害が増えています。そうした動物を駆除するだけでなく、もう一度靴として命を与えようといったことなどにも取り組んでいます。

DATA ■靴デザイン・クラフトスクール運営委員会

所在地：西区栄生一丁目3-10

・昭和30年代：名古屋靴工業組合設立
・平成21年：名古屋靴工業組合を解散し靴デザイン・クラフトスクール運営委員会を設立